



Title	Does early improvement in depressive symptom predict subsequent remission in patients with depression who are treated with duloxetine?
Author(s)	末木, 亮嗣
Journal	2016
URL	http://hdl.handle.net/10470/31565

主論文の要約

Does early improvement in depressive symptom predict subsequent remission in patients with depression who are treated with duloxetine?

Duloxetine による早期治療効果はうつ病患者の症状寛解を予測出来るか？

東京女子医科大学大学院
内科系専攻精神医学分野
(指導：石郷岡 純教授)

末木 亮嗣

Neuropsychiatric disease and treatment に投稿予定

【目的】

この研究の目的は、抗うつ薬として広く使用されている

serotonin-noradrenalin reuptake inhibitor (SNRI) の一つである duloxetine

を用いて、その早期治療効果が最終的な症状寛解を予測出来るかどうかを調べ

ることである。今回は、臨床効果をより鋭敏に検出出来るとされている

Montgomery Asberg Depression Rating Scale (MADRS) を用いて効果判定を行っ

た。MADRS は①dysphoria (抑うつ)、②retardation (精神運動抑制)、③

vegetative (自律神経症状)、という 3 つのファクターから構成されることが知

られている。我々は特定のファクターに対する早期治療反応が最終的な寛解を

予測出来るかどうかについても検証した。

【対象及び方法】

東京女子医科大学病院の外来及び入院患者を対象とした。選択基準は

Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorder, Fourth Edition

(DSM-IV) のうつ病診断基準を満たし、かつ MADRS 総得点 20 点以上を有する 18

歳以上の男女とした。臨床試験期間は 16 週間として 4 週毎にうつ病症状を評価

した。Duloxetine の開始用量は 20 mg/日とし、臨床症状に応じて、最大 60 mg/

日まで増量可能とした。寛解を MADRS スコア 10 点以下と定義し、ベースライン

から4週目までの MADRS スコアの変化が16週目における症状寛解と相関があるかどうかについて、ロジスティック回帰分析を用いて解析した。また、性別、年齢、BMI、Duloxetine 血中濃度、ベースライン MADRS スコアについても同様に解析し、最終的な症状寛解と関連性があるかどうかについて調査した。尚、この研究は東京女子医科大学倫理委員会の承認を得ている。

【結果】

同意が得られた106人の患者の内、最低1回の臨床評価が得られた67人を解析対象とした。単変量解析の結果、治療開始から4週目までの MADRS 総得点及び dysphoria ファクターの変化量（改善量）、性別（男性であること）、年齢（高齢であること）が16週目における寛解と有意な相関があることが分かった。そこでこれらを説明変数として多変量解析を行ったところ、性別のみが有意な相関を示した。

【考察】

抗うつ薬の効果に性差が存在するという報告はこれまでもなされており、今回はそれを支持する結果となった。多変量解析では有意差が出なかったが、単変量解析の結果からは MADRS 総得点、特に dysphoria ファクターの早期治療反応性に注目することが duloxetine の最終的な寛解予測に繋がる傾向があることが示唆された。

【結語】

Duloxetine の寛解予測因子として性差が挙げられ、早期治療反応性とは有意な相関が得られなかった。